

KARAKO-KAGI ARCHAEOLOGICAL MUSEUM Volume 6

平成19年度 秋季企画展

弥生の王都
唐古・鍵

ヤマト王権は
いかにして始まったか



唐古・鍵 考古学ミュージアム
KARAKO-KAGI ARCHAEOLOGICAL MUSEUM

2007.10

はじめに

「畿城」の地と弥生の中核集落 唐古・鍵

「畿城」は古代の城上郡・城下郡・十市郡に当る一帯をさし、いわゆる「ヤマト」と呼ばれた範囲にほぼ相当する地域です。この地には、弥生時代前期から後期まで継続する大環濠集落の唐古・鍵遺跡が存在し、大和弥生社会の盟主的な位置を占めています。また、古墳時代には初期「ヤマト」政権の所在地と目される纏向遺跡があり、周辺には最古級の前方後円墳が点在しています。

まさに「畿城」は、初期国家播磨の地に位置しており、日本における国家の成立を考える上でも注目される地域です。



1-1 唐古・鍵遺跡から纏向遺跡を望む（衛原章一氏撮影）

写真中央やや左下に「唐古池」、中央上に「三輪山」が見え、初瀬川を中心とした「畿城」全城が映っている。



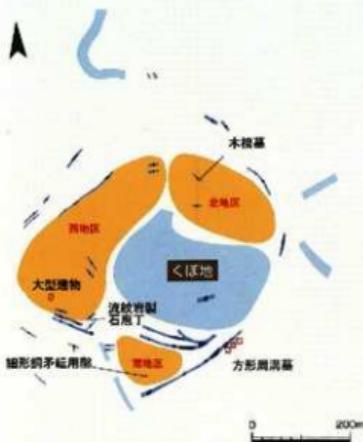
2-1 唐古・環濠跡の航空写真と調査区

集落の変遷

弥生から古墳へ

弥生前期から中期初頭

弥生前期にはムラを囲む環濠はみられず、微高地上に3つのムラが散在しました。また、前期末頃には環濠の掘削が始まりますが、環濠は西地区を囲むようで、その範囲は小規模です。西地区では、中期初頭と考えられる大型建物跡が見つかっており、遺跡の中で重要な位置を占めていたと考えられます。

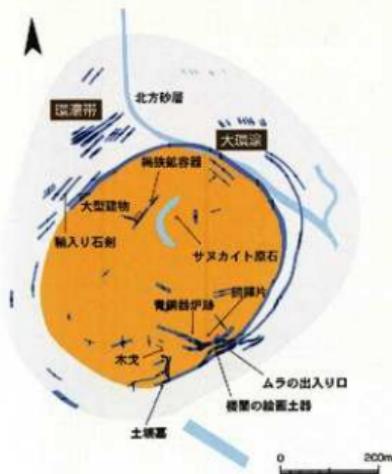


3-1 鉄の未成品・原料を貯蔵した穴（前期/第19次）

弥生中期中頃から後半

弥生中期中頃には、多条の環濠が掘削されムラの姿は一変します。これに伴って、ムラ中央部の乾燥が進行し居住区が拡大したと考えられます。

また、西地区北部には大型建物が建てられ、区画溝を伴う可能性もあります。一方、ムラの東南部には青銅器の工房が置かれ、ムラ内部の計画的配置が認められます。



3-2 北西部の大環濠（中期/第19次）

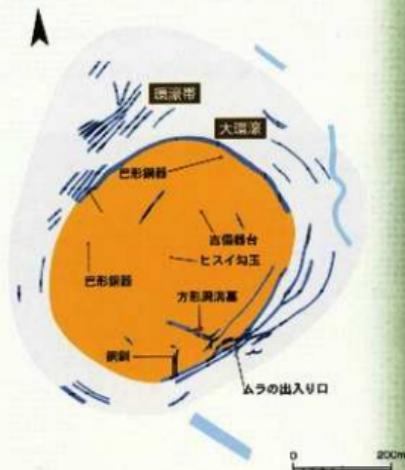
弥生後期

中期後半に成立した多条の環濠は、中期末頃に洪水で埋没します。しかし後期初頭には、再び多条の環濠が掘削され、その範囲は中期後半の様相を踏襲します。

井戸が多く検出されますが、建物は少なく後期のムラの構造は不明です。ただし、南地区では2条の区画溝が検出され、その性格が目まされます。



4-1 南地区を区画する2条の溝（後期/第69次）

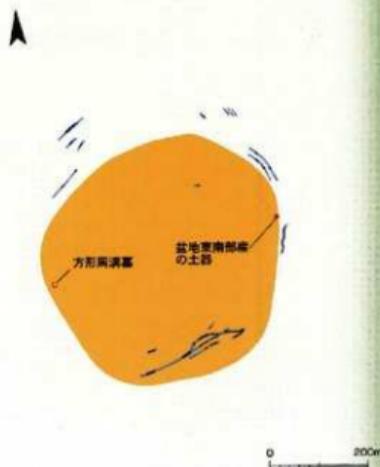


古墳前期から中期

多条の環濠は、弥生時代末頃に埋没しますが、その後も井戸などがみられ、ムラは継続したようです。また、古墳前期には再び環濠が掘削され、微高地を中心にムラが展開しました。古墳前期後半には一時衰退したようですが、古墳中期には再びムラが営まれ、方墳や前方後円墳も築造されます。



4-2 北地区の井戸（古墳前期/第48次）



集落を囲む

大環濠集落の誕生

唐古・鍵遺跡は、弥生時代前期から後期まで一貫して継続した集落で、その終末は古墳時代前期に及びます。特に、ムラの周囲に多条の環濠をめぐるした点が特徴的で、「多条環濠集落」とも呼ばれています。ここでは弥生時代を中心に、唐古・鍵遺跡の環濠の様相をみていきます。



5-1 西地区の環濠（前期／第41次）

清幅は狭いが断面が「V」字に掘削されている。唐古・鍵遺跡では、環濠の断面が「U」字形や逆台形の環濠が多い中、注目される。

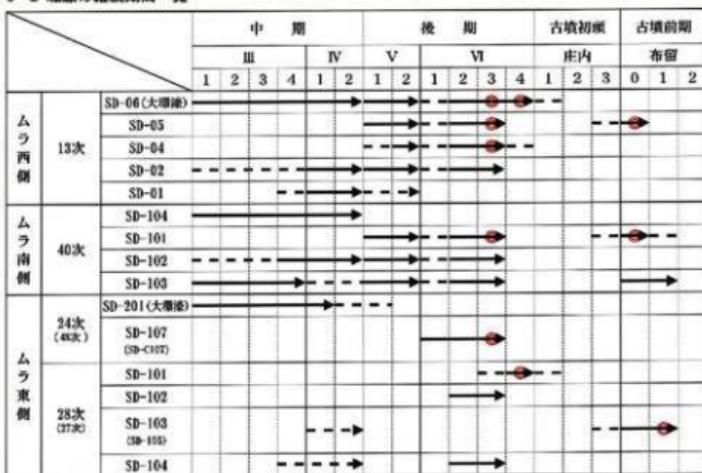
環濠の掘削 — 弥生前期 —

ムラの成立期に環濠をもつかはよくわからず、前期のムラは3ヶ所程度の微高地を中心に展開したと考えられます。

環濠の掘削は前期末から中期初頭に始められ、西地区を囲む環濠を検出しています。第41次調査では、幅5m、深さ1.4mの二段掘りの濠がみられ、下段は「V」字になっています。また、第16次調査でも溝2条を確認していますが、いずれも大環濠が成立する段階には埋没しています。

また、南地区の北側には排水を主目的とする大規模な区画溝がみられます。居住区を区画する可能性があり、環濠になるかは今後の課題です。

5-2 環濠の継続期間一覧



- 環濠開口期
- > 環濠開口期？
- 土器多量投棄

弥生時代の暦年は『奈良県の弥生土器集成』。古墳時代の暦年は寺沢(1996)による。

大環濠の成立と多条化 — 弥生中期 —

分立していた居住区は、中期中頃に大環濠が掘られ統合されます。その範囲は直径500mの範囲に及び、環濠の大きさは、最大で幅8m、深さ1.8mとなります。

大環濠の成立後には、外側に条数を増やすように環濠が掘削され、集落は多条の環濠集落へと変貌します。西北側では、中期後半の環濠が幅100mの範囲に約5条検出されており、「環濠帯」を形成します。出土遺物は、集落に最も近い大環濠が多く、外側ではわずかです。大環濠の成立により、ムラの「内」と「外」が明確に分けられたと考えられます。

中期の環濠は、溝浚えを繰り返しながら、その機能を保っていきますが、中期末頃には洪水で埋没したと考えられます。これまで、多くの環濠で洪水に伴う砂層を確認しています。



6-1 洪水で埋没した東南部の環濠（中期／第40次）
環濠の上部が白い砂層によって埋没していることがわかる。



6-2 東南部の環濠群（各調査航空写真を合成）

● は環濠に打ちこまれた積脚で、直線的につながることからムラの出入口になると思われる。

再掘削される環濠 —弥生後期—

弥生後期には、中期に埋没した環濠を再掘削し環濠集落を維持しました。後期の環濠は、中期と幅は同じくらいですが、同じところを掘り直すため、深さは浅くなっています。

後期初頭には大環濠とその外側の環濠を再掘削し、その後、後期後半に外側に条数を増やしています。中期の状況と同様に、北西側に多く掘削されており、まさに低地に立地する「城塞」の様相を呈しています。

ところで、東南側の環濠では、後期初頭に特徴的な行為がみられます。多くの完形土器が環濠内に落ち込んだ状態で検出されており、土器を環濠を掘削後に、土手に並べていたと推定されます。中期末に洪水で環濠が埋没したことから、今後災害がないように、地鎮の意味で並べたのではないのでしょうか。



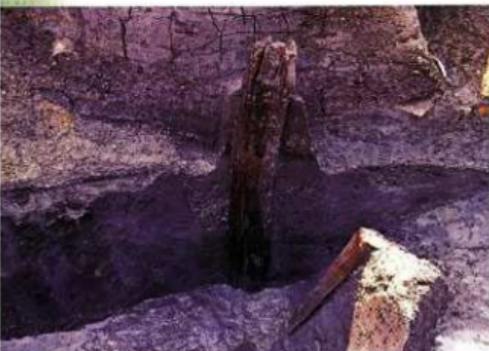
7-4 環濠に並べられていた器台（後期／第75次）



7-1 錐の未成品などが貯木された南側の環濠（後期／第69次）



7-2 環濠のふちに並べられていた土器（後期／第47次）



7-3 環濠に打ち込まれた横脚（後期／第40次）

さまざまな建築物

竪穴住居と掘立柱建物、大型建物

唐古・縄遺跡では遺構の重複が激しく、竪穴住居の検出は大変に難しい状況です。特に、竪穴住居が築造される場所は、同一場所で建替えがおこなわれるケースが多く、居住区の具体的な様相は明らかではありません。

ただし、灰跡と推定される炭灰のつまった穴などから、竪穴住居の存在が想定される地区があり、微高地からやや下位に立地します。一方、微高地の上には、掘立柱建物が造られたようで、地区や立地により住居の違いがみられます。

こうした違いは、地区の性格や集団の差を反映するかもしれません。



8-1 南地区の円形の竪穴住居（中期／第65次）



8-2 掘立柱建物の柱穴（前期／第22次）



8-3 掘立柱建物の柱穴の礎板（中期／第61次）

棟持柱をもつ総柱建物 - 第74次調査 -

南北に長い建物で、南北5間（桁行き/11.6m）以上、東西2間（梁行き/6.8m）の規模です。棟持柱をもつ総柱建物で、こうした構造の建物としては最古級です。ケヤキの側柱3本とヤマガワの棟持柱1本が残っていましたが、他の柱は抜き取られていました。北東隅の倒されていた柱には目渡穴がみられましたが、当時のまま建てられていた東西両側の柱2本には目渡穴がみられません。

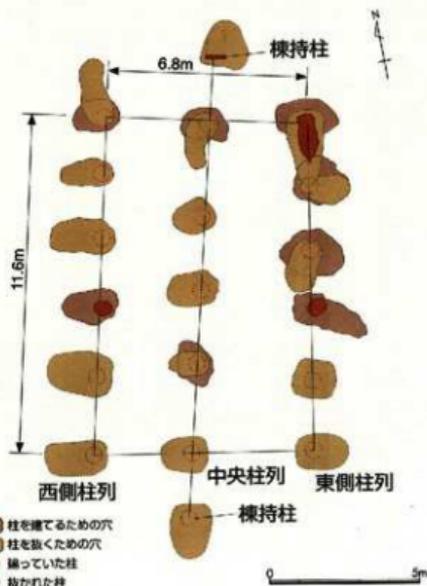
この大型建物は、大塚漆が成立する以前の西地区の微高地に立地します。周辺には居住区で形成される遺物包含層（黒褐色土）がほとんど無く、遺構密度もあまり高くありません。付属施設に関しては今後の課題ですが、大型建物が建っていた空間は、他の居住区とは様相が異なっていた可能性があります。



9-1 倒されたままの北東隅柱（中期/第74次）



9-2 西地区の中期初頭の大型建物跡（中期/第74次）
直径0.3m、高さ2mの紙管で柱位置を復元する。紙管が無い部分は柱が残存する。



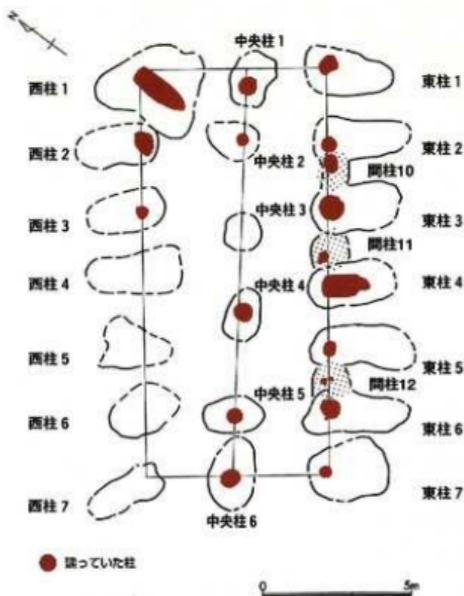
9-3 大型建物（第74次調査）の柱配置復元図

中期中頃の大型建物 ー第93次調査ー

北東ー南西方向に軸をもつ平面長方形の建物で、桁行き6間(13.2m)、梁行き2間(6m)の規模です。第74次調査建物と同様に総柱建物ですが、棟持柱はなく、東側の柱列では基本となる7本の柱の間に、3本の間柱が添えられています。これは建物が傾いたり痛むのを、補修するものと考えられます。

この大型建物は、大塚遺成成立後の西地区北部に立地し、第74次調査の建物とは約200m離れています。この地区は弥生時代前期から遺構の密度が高く、遺物包含層が厚いなど、前述した第74次の大型建物とは様子が大いに異なります。

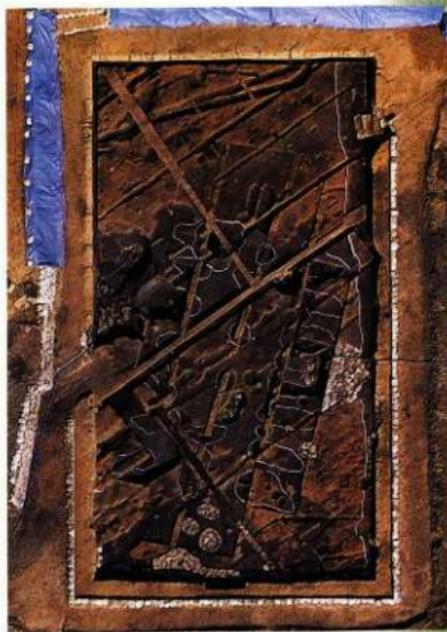
また、建物の東側には並行する区画溝があり、その外側はさらに低くなっています。この大型建物は微高地の縁辺に立地すると推察され、北西側に関連する建物の広がりが見込まれます。



10-2 大型建物(第93次調査)の柱配置図



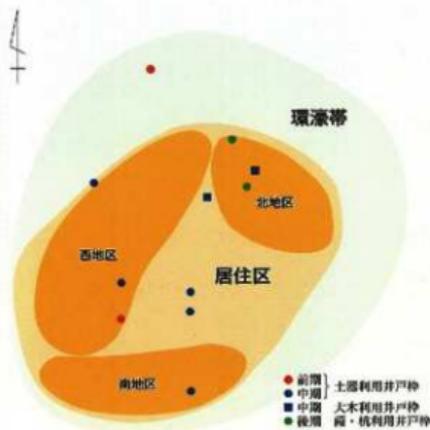
10-1 倒されたままの北西隅柱(中層/第93次)



10-3 西地区北部の中期中頃の大型建物跡(中層/第93次)

さまざまな井戸

「清水」を確保する



11-1 井戸枠をもつ井戸の分布図

1936～37年に行われた唐古池の発掘調査では、大小の「竪穴」（現在では「土坑」と称す）が100基あまり検出されました。このうち小さな「竪穴」は径1～2m前後で、多数の壺形土器が出土しました。報告書では、この「竪穴」を貯蔵穴と推定しましたが、その後の調査でも同様の土坑が多数みつかっており、現在では井戸と考えて間違いないでしょう。

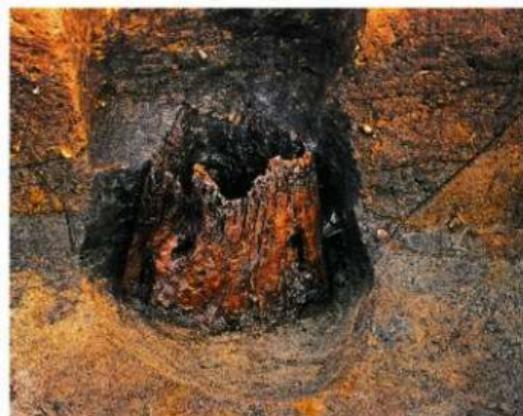
このような井戸は中期初頭頃に出現し、大環濠の掘削後に増加しました。環濠集落の内部である居住区に掘削されており、生活用水として「清水」を確保したものと考えられます。

唐古・鏡遺跡では素掘りの井戸が大半を占め、井戸枠をもつ例は稀です。素掘り井戸は、あまり管理されていなかったようで掘削後、短時間で埋没します。

一方、井戸枠をもつ井戸は弥生中期に発達し、井戸枠には削り貫いた大木や大臼・大形土器が利用されました。また、前期から中期中頃には、地表に露出した旧河道の砂層に大形土器を埋め込んだ「水溜め場」的なものもみられます。これらは井戸と区別して「集水施設」と呼んでいます。



11-2 大臼と甕を利用した井戸枠（中期／第69次）



12-1 大木を削り貫いた井戸枠（中期／第23次）



12-2 大壺の井戸枠（中期／第50次）

大壺の底部を打ち欠き、逆さに据えている。大壺内には罐類壺が供献されていた。



12-3 大壺の井戸枠（中期／第50次）

大壺の底部と口頸部を打ち欠き、砂質土に埋め込んでいた。



12-4 大壺の集水施設（前期／第17次）

大壺の底部を打ち欠いた胴部下半を河道内の砂層に埋め込んでいた。



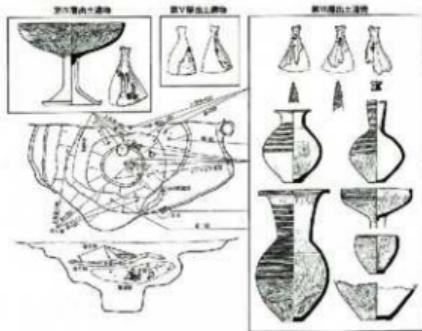
13-1 西地区の大型井戸（中期／第20次）

弥生中期の井戸とまつり

井戸が増加する中期後半には、井戸に対する儀礼も確立し、井戸が埋没する過程で水差形土器などが1～2点供献されます。また、このような井戸は、祭祀遺物の廃棄穴に転用されることも多く、第20次調査の井戸(SX-101)では、埋没過程にト骨やアカニシ・犬の骨(脚部)・雑穀を煮沸した壺などが廃棄されていました。長軸6.5m、深さ2.4mと唐古・鍵遺跡では最も大きく、特別な井戸であったと考えられます。その他にも大型の井戸に初穀が厚く堆積し、これに伴い木製戈や盾・ト骨などが出土する例もあり、大規模な脱穀行為に伴う祭祀が想定できます。



13-2 大型井戸から出土した土器（中期／第20次）



13-4 大型井戸の出土遺物関係図



13-3 大型井戸から出土した祭祀遺物（中期／第20次）

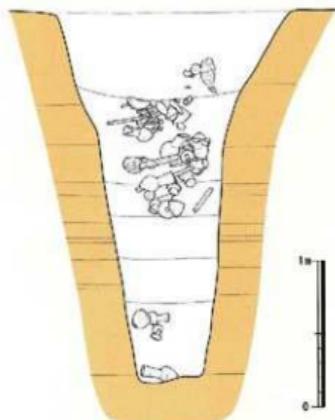
弥生後期の井戸とまつり

唐古・鍵遺跡では、後期の井戸が最も多くみつかっています。しかし、井戸の規模は中期に比べて小型化し、径1.5m、深さ2mほどのものが主流になります。

井戸に伴う儀礼は中期から継続し、長頸壺や広口壺・甕・鉢などの完形土器が、10点以上供獻されます。特に注目されるのは、長頸壺・広口壺に記号が描かれた例が多く、の中には絵画土器との関係が認められるものもあります。まさに「まつりの器」として、井戸に供獻されたのでしょう。



14-1 井戸に供獻された長頸壺の出土状況（後期／第33次）



14-2 長頸壺を多量に供獻した井戸の断面図（後期／第33次）



14-3 井戸に供獻された記号のある長頸壺（後期／第33次）

ムラでの手工業生産

石器・木器・青銅器生産と各地区の特徴



15-1 埋納されたサヌカイト原石（中期/第37次）



15-2 サヌカイトの原石・剥片（前・中期/第20次ほか）



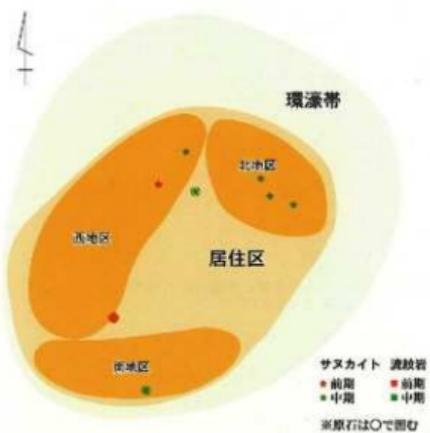
15-3 さまざまな打製石器（第13次ほか）

打製石器の製作

石鏃・石剣・石小刀などの打製石器は、約12km離れた奈良県・大阪府境の二上山で産出するサヌカイトを原料として作られました。

唐古池の南側（第37次）では、サヌカイトの原石5点が埋納された状態でみつかりました。また、中期の井戸や小穴からはサヌカイトの剥片が土坑に投棄された状態で出土し、石器製作に伴う屑をまとめて捨てたものと考えられます。

こうした資料は、ムラで原石を入手して石器を製作したことを示しますが、特に、北地区を中心に原石や剥片が出土しています。このことから、この地区が中心的に石器生産に携わっていたと考えられます。



15-4 石器の原石、剥片・チップの廃棄穴分布

石砲丁の製作

前期には奈良県橿原市・耳成山の流紋岩、中期には和歌山県・紀ノ川流域の結晶片岩を利用して石砲丁が作られました。流紋岩の原石や剥片は南地区に集中し、特に、第16次調査では重さ約10kgの原石2点や、遺物箱10個分の剥片が出土しました。この地区で石砲丁を製作していたことは確かでしょう。

一方、結晶片岩は各地区で出土しますが、なかでも未成品が遺跡中央部で多く見つかる傾向があります。このようなことから、石器の入手から製作にあたって、この地区が中心的な役割を果たした可能性があります。



16-1 溝に投棄された流紋岩原石（中期／第52次）



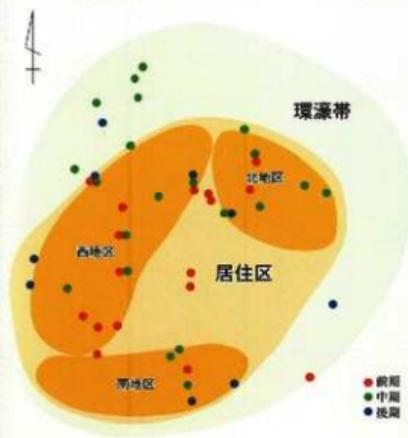
16-2 流紋岩の原石（第52次ほか）



16-3 環濠に投棄された石砲丁（中期／第13次）



16-4 石砲丁や石弁などの磨製石器（第61次ほか）



17-1 木器の原木・未成品の分布

木器の製作

ムラ内部では木器の未成品が出土し、木器の製作技術の1つとして、原材料をミカン割りにする手法を知ることができます。特に、ケヤキやカシなどの広葉樹は硬質なため、木材を水に漬けながら木器の加工が行われました。また、こうした工程は、木材のあく抜きや歪みの修正といった目的もあったと考えられています。

これまで、唐古・鍵遺跡では貯木専用の土坑（木器貯蔵穴）が発掘されていますが、これらは弥生前期に多く、中期以降、徐々に減少したようです。弥生時代中・後期には、井戸や区画溝・環濠などの水溜りを利用して、木材の水漬けが行われました。



17-2



17-3



17-4 斧柄未成品（前期/第50次）

17-2・17-3 木器貯蔵穴（前期/第20次）

木器貯蔵穴の埋没には2つのパターンがみられる。ひとつは穴底に斧柄など未成品を残し上部はさまざまな遺物で埋没するパターン（左上）、もうひとつは木器未成品を含まず、地山層の黒色粘土や緑灰色シルト層で一気に埋め戻すパターン（左下）である。前者は、木器未成品を取り出す機会が失われたまま開口した状態であったことを示している。

青銅器の鑄造

ムラの東南部では、銅鐸などの鑄型や送風管・取飯などが集中して出土し、青銅器の鑄造が行われたと考えられます。特に、第65次調査では、銅・鉛・錫の溶解に使われた可能性がある炉の基底部が検出され、鑄造に関連する工房があったと想定されます。

銅鐸などの青銅器は、当初は石製の鑄型を使い鑄造が行われましたが、唐古・舞遺跡では土製鑄型が主体を占め特徴的です。これは鑄造時のガス抜きを容易にする工夫と考えられ、弥生時代の高度なものの作りがうかがえます。

多量の鑄型の存在から、多くの青銅器を鑄造していたと推定されますが、現在のところ他の遺跡から出土した青銅器が唐古・舞産かどうかは確認されていません。



18-1 青銅器鑄造の炉跡（中題／第65次）



18-2 青銅器鑄造関連遺物（中・後期／第3次ほか）
石製・土製の鑄型のほかに、取飯・送風管などがセットでみられる。



18-3 青銅製品と銅塊・鋳滓（中・後期／第3次ほか）

集落と墓域

方形周溝墓と土器棺墓



19-1 唐古・鍵遺跡の墓関連図

これまで唐古・鍵遺跡では、成人用の土壙墓や木棺墓、方形周溝墓、小児用の土器棺墓がみついています。墓域の展開は集落の変遷とも関連し、時期的変化が認められます。

なお、これまで副葬品を伴う例は古墳時代初頭の壺棺のみです。ただし、中期には壺や高杯を供献した例があります。

弥生前期から中期初頭の墓

大環濠成立以前の唐古・鍵遺跡では、分散する集落域に近接して、木棺墓や方形周溝墓などの墓域が小規模に展開します。第23次調査では、木棺墓から男性の人骨が検出され、渡来系の特徴が指摘されています。また、遺跡南端で行われた第91次調査では、環濠の間から3基の方形周溝墓がみついています。



19-2 木棺墓（前期/第23次）



19-3 東南部で検出された中期初頭の方形周溝墓（中期/第91次）

弥生中期後半の墓

大環濠が成立する弥生中期中頃以降、環濠間では成人用の方形周溝墓はみられなくなりますが、環濠の内側には小児用の土器棺墓が展開します。

一方、成人用の墓域は、環濠の外側に展開した可能性が高いでしょう。唐古・鍵遺跡から1km程離れた清水風遺跡や阪手東遺跡などで方形周溝墓が検出されており、唐古・鍵遺跡の墓域の可能性もあります。



20-1 土器棺 (中期/第50次)

遺跡中央部で検出した土器棺である。棺本体の壺は口頸部を欠き、蓋とした壺は胴部を縦半分に割ったもので塞いでいる。この土器棺の近くで2基の土器棺が見つかった。

弥生後期の墓

弥生後期にも環濠の内側で土器棺墓がみられます。また、大環濠が埋没する弥生後期末頃には、青銅器の工房が置かれていた南地区を中心に、方形周溝墓が2基みられます。ただし、大規模な墓域は、集落の外側に展開すると考えられます。



20-2 土器棺 (後期/第65次)

方形周溝墓に隣接する位置に造られた2基の土器棺。



20-3 後期の方形周溝墓 (後期/第65次)

南地区では、後期の方形周溝墓が2基程度見つかった。周溝内は多量の土器で埋没していた。方形周溝墓は一辺7.5m×8mの規模である。

環濠の放棄と集落の変質

古墳時代初頭の唐古・鍵

弥生時代の環濠は、弥生時代後期末（大和第六-3様式）に埋没します。従来、こうした状況は唐古・鍵遺跡の終焉期とされてきましたが、それ以後も井戸などが検出され集落は維持されているようです。また、出土する土器の量も多く、集落が継続したことを裏付けています。

ただし、弥生時代後期末頃から集落内部の状況は変質しつつあるようです。青銅器の工房があった東南部には方形周溝墓が築造され、居住区と墓域が隣接する状況がみられます。その後、大型建物がみられた西地区でも古墳時代初頭の井戸や方形周溝墓が検出され、居住区と墓が隣接します。

こうした状況は、大環濠集落の成立に先行する弥生前期から中期初頭に類似し、分立的な集落形態と推定されます。



21-1 西側環濠に投棄された土器群（後期/第13次）



21-2 古墳時代初頭の方形周溝墓（古墳初頭/第74次）

西地区で検出したもので、大型建物跡に重複するように周溝を確認した（写真右端）。この調査では同時期の井戸（22-1）もあり、居住区と隣在している状況である。

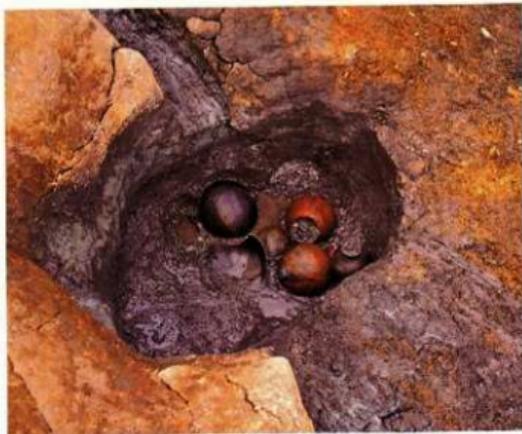


21-3 古墳時代初頭の壘棺墓（古墳初頭/第19次）

西地区の環濠のやや内側で検出した盆地東南部産の二重口罎甕である。棺内からは、碧玉製の管玉とガラス小玉が出土している。



22-1 古墳時代初頭の井戸（古墳初頭／第74次）
西地区で検出した井戸で、中層から木鏝14点、下層から
鉄製ヤリガンナが出土した。



22-2 古墳時代初頭の井戸（古墳初頭／第40次）
南地区で検出した井戸で、9点の鏝と下層から木鏝12点
が出土した。

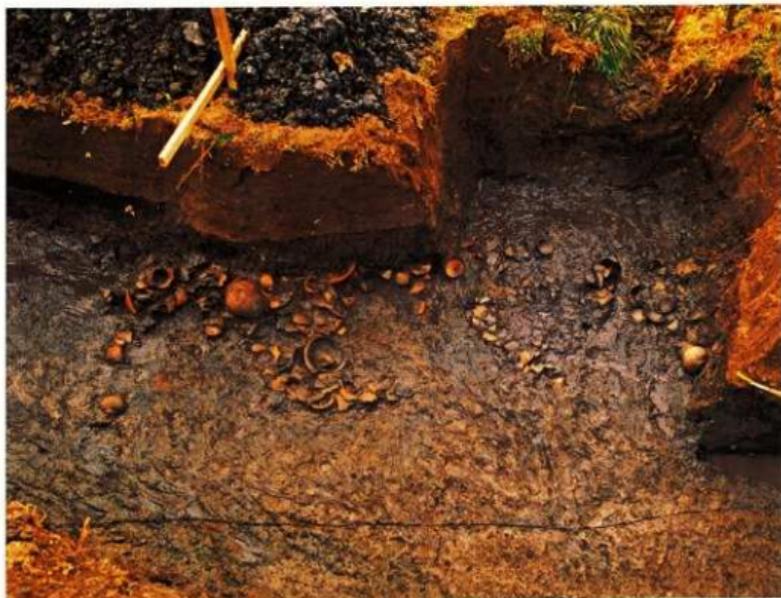


22-3 井戸から出土した土器（古墳初頭／第40次）

東環濠に投棄された盆地東南部産の土器

これまで維持されてきた環濠は、多量の完形土器を投棄して埋没するという特徴があります。こうした状況は、弥生時代の環濠の埋没とは大きく異なり、環濠の役目が終わったことを知らしめる行為ともみ取れます。

ここで注目されるのが、ムラの東部での環濠の埋没です。この環濠は古墳時代初頭（庄内式・大和第VI-4様式）の多量の土器が投棄され埋没していますが、その大半が奈良盆地東南部産の土器です。奈良盆地東南部産の土器は、暗褐色のチョコレート色を呈し、角閃石を多く含む特徴があります。これは生駒西麓産の土器とも共通しますが、やや褐色は淡く角閃石も粒形が小さいです。奈良盆地東南部では、縦向遺跡や芝遺跡などが展開し、いずれかの集落から運ばれてきた土器でしょう。奈良盆地東南部産の土器は、弥生時代を通じて散見しますが、後期後半から急激に量が増加します。このことは、盆地東南部の人たちが唐古・鍵ムラの継続にいかにかかわったかを考える上で重要な資料と考えられます。



23-1 環濠に投棄された盆地東南部産の土器（古墳初頭／第34次）



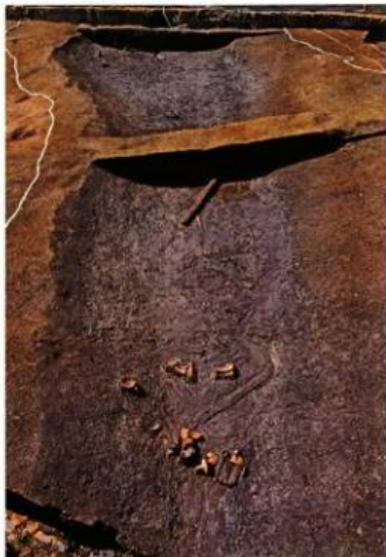
24-1 環濠に投棄された盆地東南部産の土器（古墳初頭／第34次）



24-2 縦向遺跡から出土した地元産の土器

新しい時代の幕開け

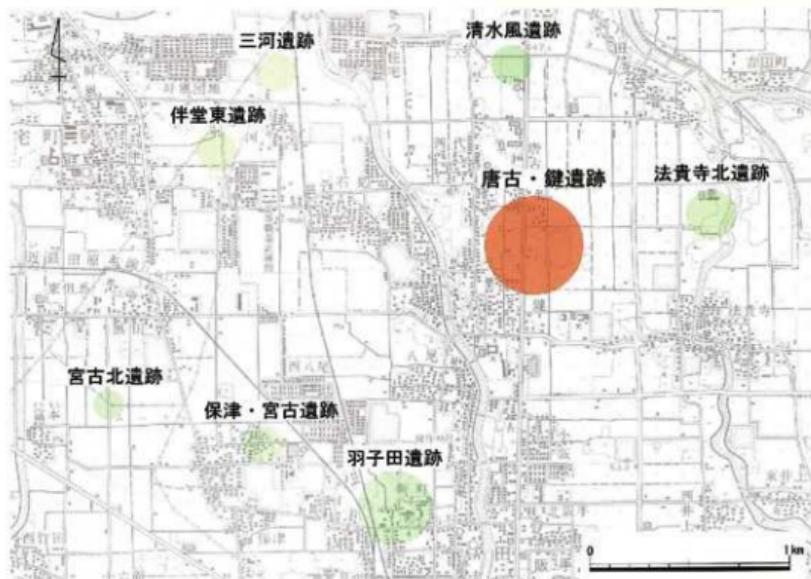
古墳時代前期の唐古・鍵



25-1 再掘削された環濠（古墳前期/第47次）

弥生時代の終末頃に埋没した大環濠は、古墳時代前期(布留0式)に再掘削されます。その範囲は直径約500mに及び、弥生時代の環濠をほぼ踏襲します。ただし、環濠の規模は小さく幅3m、深さ1m程度です。

しかし、この段階にムラを大きく取り囲む意識がみられることは重要で、微高地である北・西・南地区を中心に井戸などがみられます。この地区が居住区と考えられますが、弥生時代に比べると遺構の密度は疎らです。この時期、周辺では清水風遺跡や羽子田遺跡などの集落遺跡が展開しますが、規模において唐古・鍵遺跡は大きく、この地域の中心的な遺跡であったでしょう。



25-2 古墳時代前期の集落分布



26-1 再掘削された北西側の埋溝 (古墳前期/第13次)



26-2 北地区の井戸から出土した土器 (古墳前期/第5次)



26-3 北地区の井戸 (古墳前期/第23次)



26-4 西地区の井戸から出土した土器 (古墳前期/第38次)

その後の唐古・鍵

古墳群と中世居館、唐古池



27-1 北地区の大型井戸（古墳中期／第59次）
馬骨や山下駄・木鉢・手網・腰掛・須恵器が出土し祭祀的色彩が強い。



27-2 大型井戸から出土した土器（古墳中期／第59次）



27-3 前方後円墳の周濠（古墳後期／第72次）

集落の上に築造された古墳群

4世紀後半から5世紀前半の様相は不明な点が多いですが、5世紀後半から6世紀前半には集落や古墳群が形成されました。

集落は北地区を中心に展開しています。第59次調査で検出された大型井戸からは、埋納された馬骨が出土しました。また、製塩土器や子持ち勾玉など重要な遺物もみられ、盆地中央部の中核的集落の一つとみてよいでしょう。

一方、古墳群は西地区を中心に展開し、一辺10m前後の方墳7基が確認されます。遺跡中央部に当たる場所でも検出した4号墳は、唐古・鍵古墳群の盟主と考えられる前方後円墳です。



27-4 古墳周濠から出土した馬形埴輪（古墳後期／第72次）

中世「唐古氏」の居館

7世紀から9世紀の状況はわかりませんが、10世紀になると、北地区では木組みの井戸が、西地区では黒色土器埋納穴などがみられ、屋敷が造られていたことがわかります。唐古・鍵周辺が荘園化されていったことが想定されます。

その後、両地区を中心に、遺跡は16世紀頃まで続きます。特に西地区では、12世紀後半に環濠をめぐる居館が出現し、15世紀頃には南北300m、東西200mの範囲を囲む大規模な居館となります。『大乘院寺社雑事記』には、在地武士である「唐古」・「唐古東」・「唐古南」の名前がみえます。

唐古池の築造

唐古池は、日本書紀に記載されている「韓人池」の候補地の一つにも考えられましたが、現在では江戸時代に造られた農業用の溜池であることが発掘調査や古文書から判明しています。唐古池の発掘調査は、1936・37年の池内部とその後5回にわたる堤防部分でおこなわれました。東側の堤防内側で実施した第23次調査では、堤防盛土下で中世素掘小溝を検出するとともに堤防の北側への拡張を盛土層の重なりから確認しました。このことから、江戸時代の古絵図に示された「一町池」が、北側へ2回の拡張によって「二町池」になったことが裏付けられました。

28-3 唐古池が描かれた古絵図（江戸時代/元文2年：1736）
写真下が北。唐古池は100m四方の一町池として描かれており、池の西側には建物があつた。この場所は最近まで畑となつていた。



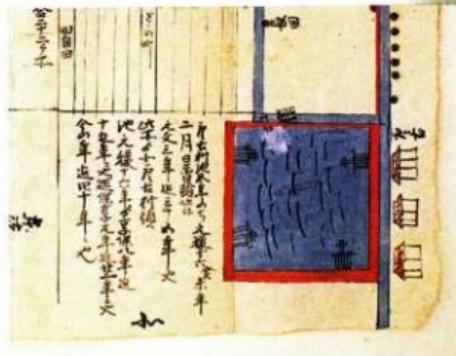
28-1 「唐古南」氏?の居館環濠（室町時代/第22次）

現在の地割りラインに合致するように大溝が検出され、居館の位置をほぼ推定することができる。



28-2 唐古池の堤防（江戸時代/第23次）

堤防の盛土は、黒褐色土と淡褐色土で構成されている。黒褐色土は、唐古池の堤防の南半部分にみられることから、当初の池堤の土層と推定される。



■唐古・鍵遺跡の変遷と周辺の遺跡■

緑色字：遺構 茶色字：遺物 □ 方形周溝墓 ● 土槌墓 ■ 木棺墓 ○ 土器槌墓

		弥生時代										古墳時代							
		前期		中期前葉		中期中葉				中期後葉		後期		初頭		前期			
		I-1	I-2	II-1	II-2	III-1	III-2	III-3	III-4	IV-1	IV-2	V-1・2	VI-1	VI-2	VI-3	VI-4	庄内	布留	
環濠の掘削		集落出現 → 大環濠の成立 → 環濠の多発化 → 洪水 → 環濠の再掘削 → 環濠の放棄 → 集落継続 → 環濠の再掘削																	
各地区の動き	北地区	南方砂層 中央砂層 木器貯蔵穴群		大木朝貫井戸 (第1次) 大型井戸 (第37-58次) 麻布切れ (第23次)				石庵丁埋納 (第59次) サヌカイト原石 (第36次)				北方砂層		吉備産器台 (第13次)		盆地東南部産土器		丹塗り土 (第19次)	
	西地区	木器貯蔵穴群		環濠の掘削 大型建物 (第74次) 流紋岩原石・石庵丁製作 (第18次)		大型井戸 (第20次) 大型建物 (第63次)		ト骨 ケヤキ原木 (第13次)		イノシシ下顎骨 集積 (第13次)		石庵丁投棄 (第13次)		縄文土製品 吉備産大甕 (第19次)		縄文土製品 鶏頭形土製品 (第112次)		鉄製ヤリガンナ (第74次)	
	南地区			製瓶用 銅矛 (第33次)		天龍川流域産土 銅矛 (第58次)		大臼井戸枠 (第69次)		木杓 櫛型 繪圖土器 (第47次)		青銅器鑄造工房 (第65次)		中塚部区溝溝 (第66次) ムラの出入口 (第40・47次)		板状鉄片 (第40次)		S字口鍔座 (第9次)	
全地区の遺物		彩文土器・木器の製作				結晶片若磐石庵丁の製作 サヌカイト製石器の製作				繪圖土器の盛行		記号文		井戸への土器供献					
周辺の遺跡		清水風遺跡 【方形周溝墓】		阪手東・羽子田遺跡 【方形周溝墓】		清水風・八尾九原・宮古北 保津・宮古遺跡【集落形成】 (井戸・溝・河跡・掘立柱建物)				清水風・羽子田・宮古北 保津・宮古遺跡【集落形成】 ※古墳時代まで継続				法貴寺北遺跡 【土槌墓・方形周溝墓】		清水風・法貴寺北遺跡 【土槌墓・方形周溝墓】		宮古北遺跡 【方形区画】	



繪圖土器 (第47次)



銅片 (第77次)



縄文土製品とヒスイ勾玉 (第80次)



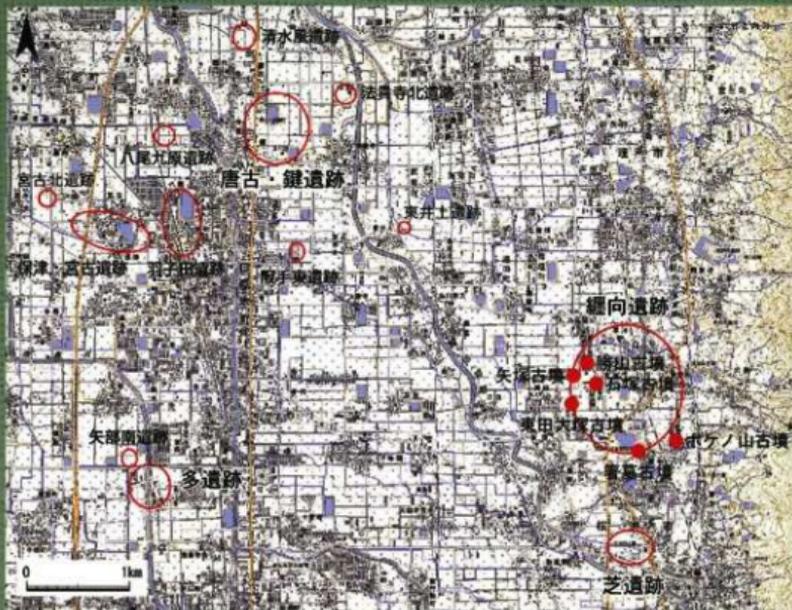
吉備産大甕 (第19次)



木製矢鏃 (第13次)



縄文土製品 (第112次)



凡例

1. 本書は、平成19年度文化庁埋蔵文化財保存活用整備事業の1つとして、唐古・鍵考古学ミュージアム平成19年度秋季企画展「ヤマト王権はいかにして始まったか～弥生の王都 唐古・鍵～」の展示図録として作成しました。
2. 本図録と展示構成は、一部異なるところがあり、展示品と異なるものや展示品の全てではありません。
3. 関連事業として、下記の事業を予定しています。
10月28日(日) 講演会 石野 博臣氏
シンポジウム 寺澤 薫・森下章司・秋山浩三・松本武彦・橋本舞彦の諸氏・藤田三郎(田原本青垣生涯学習センター)
9月8日・22日(土) 講座 「磯城の弥生遺跡①②」(田原本青垣生涯学習センター)
10月13日・27日(土) 講座 「磯城の古墳時代遺跡①②」(桜井市立埋蔵文化財センター)
11月10日(土) 遺跡ウォーク 「唐古・鍵遺跡から纏向遺跡を歩く」
4. 展示および図録の作成に当たっては、下記の機関ならびに個人の方からご協力を賜りました。厚くお礼申し上げます。
(独) 国立文化財機構 奈良文化財研究所/奈良県立橿原考古学研究所/桜井市教育委員会/(財) 桜井市文化財協会
梅原章一/佐藤右文/寺澤薫/中村利光/難波洋三/橋本舞彦/松宮昌樹/村上隆
5. 本図録の作成および企画展は、石川ゆずはの協力を得て、河森一浩・藤田三郎が担当しました。

会 期 2007年10月13日～11月18日

平成19年度 秋季企画展「ヤマト王権はいかにして始まったか ～弥生の王都 唐古・鍵～」
唐古・鍵考古学ミュージアム 展示図録 Vol.6

発行日 2007年10月13日

編 集 唐古・鍵考古学ミュージアム 〒636-0247 奈良県磯城郡田原本町阪手233-1

発 行 田原本町教育委員会